

# 學部課程の通譯教育からみる異文化 コミュニケーション論の一考察

申長 鎬\*

When approaching the problems in interpretation education of undergraduate course, what meaning is there to set up an intercultural perspective? and discussing the role of interpretation is how do contribute to intercultural understanding? Also, How does this contribute to the theoretical and practical aspects of interpretation? However, there is some question. Interpreters as intermediaries for bilingual·bicultural, 'the linguistically must be a bilingual, and culturally should be bicultural' are a common point. That is, increasing the levels of interpretation education course in intercultural communication capability, undergraduate basic capacity to cope with the cultural problem must be learned as one of interpreting skill. In this paper, the author will be discussed on the intercultural communication in the field of interpretation education.

Key words : Interpretation Education, The Position of Interpretation, Intercultural Communication, Different Language, Information Transmission (通訳教育、解釈の位置付け、異文化間コミュニケーション、異なる言語、情報伝送)

## 1. はじめに

通訳という言語行為の目的は二つの言語間の情報伝達及び異文化間の情報交換にある。このように起点言語の情報が一旦通訳という中間処理を受け、そして目標言語に再生されていくという事実は、言語情報が伝達される過程において中間処理機能を介在していることを示し

---

\* 大邱外国語大学校 通訳学科 副教授

ている<sup>1)</sup>。こいした一連の過程を通訳過程から見る異文化コミュニケーションと言えよう。

我々の立場から言えば、世界の中には色々な文化があって、その各々の文化を「異文化」と言うのが通常である。つまり、「異文化」というのは最初から異なる文化ということである。そして、異文化の理解というのは最初から違っているものを理解しなければならないということになり、あまり好ましくないと思われがちでもある<sup>2)</sup>。

しかし、実は私たちは誰しもがある特定の文化の中で生まれ育っている。そのおかげで他の文化と出会った時には感動を覚えたりする場合もある。

このように相違なる文化を様々な契機によって触れ合う時、そこに異文化コミュニケーションが生ずるのである。

したがって、通訳教育を論ずるときにこうした異文化コミュニケーションという視点からの問題設定が欠かせないのはごく常識的な話であるかも知れない。

例えば、日韓通訳の現場では「猫の手も借りたい」とか「石の上にも三年」といった日本文化的な異文化要素が加味された特有な言い回しに接した時にはこれらを韓国語でどのように通訳されるのか興味津々の気持ちで期待したこともあろう。

つまり、通訳教育に関する問題にアプローチする際、異文化コミュニケーションという視点を設定することが如何なる意味があって、そうした発想で通訳の役割を論じることが果たして異文化理解に如何に寄与し、通訳の理論的、実質においてどのように寄与するかについて疑問に思われる部分もある。

確かに通訳者は異言語・異文化間の仲立を担うことから言語的にはバイリンガル(bilingual)で、文化的にはバイカルチュラル(bicultural)である事が理想的だと指摘されている。

要するに異文化コミュニケーションの問題については通訳教育を受

---

1) 楊承淑(2005)「通訳における情報提示—日本語を起点言語として」『通訳研究』日本通訳学会、p.31.

2) 東京大学出版会編(1993)『異文化への理解』東京大学出版会、p.305.

けながらそれらに対する意識を高めることと文化的諸問題に対処するための基本的な能力を通訳のスキルの一つとして習得せねばならないといえるのである。

そこで、本稿では通訳教育の現場における異文化コミュニケーション論の位置づけを考察したいと思う。

## 2. 通訳教育と異文化コミュニケーション論

事典的な意味としての通訳の定義は“異なった言語を話す人や言語の不自由な人などの間にたち、その話を翻訳して主として音声によって伝えて、互いの意志を通じさせること、またその人”とされて、特に、商談、取り引き、交渉、討論、講演などの際、当事者間あるいは話し手と聴衆の間に立って両者の間の伝達を助けることを指す。

それに通訳することは一種の翻訳であるとも言えるが、翻訳と異なる点は主として音声によること、また直接人と人との間に立って、実際のな要求を満たすことを目的とする点である<sup>3)</sup>。

このように異言語を母語としている者同士がコミュニケーションを行なう場合に必要となるのが通訳行為であるとされている。

その故、異文化コミュニケーターとも言われている通訳者は少なくとも二つの文化・言語を扱う異文化に対する理解能力と異言語能力が仕事の前提条件となっている。つまり、筆者は通訳を単なる言葉の置き換えではなく、文化の置き換えでもあると見なすべきだと考えている。

同様に鳥飼氏は訳すという行為を言語という次元のみで議論するのは間違いであり、その本質は異なった文化の橋渡し、異文化を越えてメッセージを伝えることであると述べている<sup>4)</sup>。

---

3) 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店、p.614.

4) 鳥飼美子(1994)「通訳と翻訳」『異文化理解とコミュニケーション1』三修社、pp. 155-175.

恐らく、学部課程で外国語を習っている多くの人に‘あなたは何故外国語を勉強していますか’と問いかけると大半の人はネイティブ話者と自由にコミュニケーションが取れたら良いとの欲求で言葉を習っていると答える人が多いに違いない。つまり、現代の言語学習の原点は異文化コミュニケーションに対する欲求を満足させることである。

しかし、現在、外国語学習者はその言語を話す人たちと意思総通を行うのが学習の目的で、とりわけ、その国の社会・文化などに関する知識を得て文化的理解を含む意思疎通が目的として言語を習っている人は少ないと思われる。

つまり、言語教育の現場において異文化コミュニケーション能力の育成に第一の目的を与える場合は少ないのである。

特に最近の日本語教育においては言語的能力に長けた学習者の育成が益々求められていることから、筆者は以前より通訳者が備えなければならない能力として言語能力を含む文化的知識能力をも不可欠であることを主張してきた。

要するに、文化的知識能力としてあげられるのが異文化に対する社会・文化の理解能力であり、この理解能力如何によって言語的コミュニケーション能力と伴って通訳の完成度及び伝達度がさらに高くなると考えられている<sup>5)</sup>。

## 2.1 通訳教育と異文化コミュニケーション教育

本章の通訳教育と異文化コミュニケーションに関してはRoda Roberts氏の理論に従いつつ論じていきたい。まず、氏の異文化コミュニケーション論は国際コミュニケーションに限らず、世代間、両性間などのコミュニケーションにも該当する概念を持っているが、ここでは特に異言語間のコミュニケーションに焦点を絞って論じることにした。氏は言語と文化は切り離せないし、異文化交流

---

5) 申長鎬(2008)「学部課程における通訳教育の可能性と限界性」、『日本語文学』第41輯, 日本語学会, pp.65-82.

の最大の阻害要因は言語であると言っても過言ではないとしている。言語を習得するということは、その言語が代表する文化を含めて身につけるといことであるとしている。そして、翻訳者は二つの言語と二つの文化を身につけるべきであるとして、次のように述べている<sup>6)</sup>。

短期、長期の外国人滞在者が増加するにつれて、言語や社会文化の差異から生じる問題が目立つようになってきている。このような外国人滞在者に対する公共サービスとして、コミュニティ通訳の制度がある。これは日本では非常に立ち遅れているが、移民の多いオーストラリアでは政府認定の通訳資格としての位置づけを得ている。コミュニティ通訳は主に外国人居住者への言語サービスを提供するためにもうけられた制度であるが、その役割に関しては、以下の二つの考え方が可能であるとしている。

本来、“bilingual and bicultural”が望ましいとされる通訳者は、まず受容者が異文化へスムーズにとけ込むことができるように手助けをすべきである役目をもっている。このとき、通訳者は言語サービスの範囲を超えて、自国の文化や習慣を紹介する異文化教育の担い手としてコミュニケーションに積極的に参与することが期待される。そして、もう一つはこうした事が異文化コミュニケーションに基づいた伝達の方法であるとすれば、言語伝達の通訳は通訳者の業務を異文化教育から厳格に区分し、言語情報の伝達以外は決して行ってはならないのである。この時通訳者は、社会文化や現地の習慣を解説するアドバイザー的役割を果たすことが禁じられ、言語情報のみ伝達するだけを期待されるのは単なる言語情報によるコミュニケーションだとしてる。

以上のような二つの考え方にはそれぞれの長所と短所がある。前者の考え方では通訳者が文化的解説を加えると、自分の意見をはっきりと述べるのが美德である文化圏の出身者にとっては、その介入が煩

---

6) Roda Roberts(1998) 上海外国語大学・香港中文大学共催国際シンポジウム発表文、pp.2-5.

わしく思われる可能性が高いだろう。逆に、相手に自分の心情を察してもらい、先回りして世話をしてもらいたいと期待する傾向のある人などにとっては、後者の原則は非常に冷たい、気が利かない印象を与えることになるだろう。つまり、受容者の文化的背景や教育の程度によっても通訳者の役割は異ってくるのである。

本項では前者の立場を取りつつ、異文化コミュニケーション能力の涵養のために如何なる方法をもって教育を行なえば通訳教育の現場で効果的かつ異文化に対する理解度が高められるのかを事例を引用<sup>7)</sup>しながら考察したい。

異文化理解のために普遍的に用いられる資料は、視聴覚資料として映像作品などを利用する方法がある。これは日本人の日常生活などから文化的な理解度を高めるのに有効に役立つと思われる。そして、こうした視聴覚資料による学習方法は日本語教育にも役立ち、学習者がより多くの場面に接することができる。何よりその個々の現実場面を見ることによって、伝達される内容や伝達のあり方の背後にある価値観、行動様式、思考方式、適切な言語行動と非言語行動の選択、人間関係の構築などに関する日本文化を学習することにもなる。その上、その場における顕在的な行動の観察、および、それらの背後にある意識の発見を経験することができるのもっとも有効的な方法である。

これらの方法は異文化コミュニケーションの際、それぞれの状況に応じて適切な言語・文化的行動を行なうのにプラスになり、異文化コミュニケーション能力を高めらるのに効果的に働くと思われる。

そして、もう一つの方法として、新聞、雑誌などを利用した時事問題を取り上げ、討論の場を設ける学習方法を取り入れることで、異文化に対する興味を引き起こし、文化的な理解度を高めると共にお互いの文化に対する相違点を認識しつつ、異文化をありのままを受け入れられる意識を持たせる効果があると思われる。

---

7) 徐璐(2003)『異文化コミュニケーション能力の育成 - 日本語教育を中心に -』『文明21』愛知大学出版、pp.69-72.

## 2.2 通訳者条件と異文化コミュニケーション

本項では通訳者の条件を文化的要素の地平から考察していきたい。文化的素養はD.Hirsh,jr.が打ち出したもの<sup>8)</sup>である。氏の言説によれば、文化的素養とは普通のアメリカ人が共有している知識の集合であり、いわば集合的な記憶とでもいえる。それは公共の談話において前提とされている背景知識であり、あまり一般的すぎる知識でもなく、だからと言って専門的知識でもないような情報である。さらに言えば、その知識は「何となく知っている」というレベルでも構わないとされている。常識にとって不可欠な情報は、詳細なものでも、精密度の高いものでもなく社会の中で他の人たちと同じく連想ができるようなものであるとしている<sup>9)</sup>。

20世紀の後半に入って盛んに言われている国際化やグローバル化の進展に伴い、いわゆる異文化コミュニケーションにおける通訳の果たす役割が重要視されているのも事実である。国内・外で開催される国際会議においても、年々増えて行く国際交易や輸出入などの経済活動の現場においても、通訳や翻訳によって行われる言語情報の相互伝達は膨大な量に達している。

しかしながら、韓日両国共に古くから通訳に携わっている人々に対する評価は低く、自国の独自性を強調するあまり、自文化が理解されることを半ばあきらめ、半ば異文化を拒否してきたような感もある。そして、異文化との交流のなかで、相互文化を理解するまたは理解されるというような気持を持たずに、異文化との接触で自文化のアイデンティティーを確認する歪んだ方法が生まれたのではないと思われる。

こうした流れを経て、近年になってやっと異文化コミュニケーションの重要性も唱えられ、通訳という分野においても関心が持たれるようになった。

このように言語・文化的背景が異なる両者が相互の意思伝達を行

---

8) [http://en.wikipedia.org/wiki/Cultural\\_literacy](http://en.wikipedia.org/wiki/Cultural_literacy)

9) 水野的(1995)『放送通訳講義』未公開、p.113.

なおうとするとき、通訳者の存在は不可欠である。今日、通訳という行為が異文化・異言語間のコミュニケーションにとってどのような役割を果たすのかと言えば、通訳者の介在によって異文化コミュニケーションがより円滑に行なわれるという事には異見がないと思われる。

そこで、異言語間のコミュニケーションを成立させるためには如何なる条件が必要で、通訳の伝達条件に必要なものは何かについて考察してみたい。

通訳を行なうにはまず、該当外国語を正確に把握しなければならないのは言うまでもないが、同じ言語を話す人々でも全く同じ言語形式を共有しているのかといえば必ずしもそうではないのである。それは同じ言語文化を持っている人どうしても話が通じないことがあるように、言語形式のみの理解だけでは円滑な通訳が行なわれないことも多々ある。如何に努力して正確に言葉を運用しても、完璧に意思を通じさせるはできないと言っても過言ではない。

我々人間は自分の心のなかにある概念をすべての情況において完璧に言語化して伝える技術を持っていないし、仮にそのような技術を持ったとしても聞き手が期待どおりに受け止めてくれるとは限らないのである。

つまり、我々は情報をうまく伝えるために言語的な意味を理解した上で、さらに想像力も動員し、発する言葉でもってやっとコミュニケーションが成り立つのである。特に、日本語は極めてコンテキストに依存する言語であるから聞き手が発言者に関する文化的知識を持たなければ話は通じにくい場合も多くある。

前述のように同じ言語を話す者同士でさえコミュニケーションが成立されにくいのに通訳者を仲立させてコミュニケーションを行うのは容易いことではないのである。

いずれにしても通訳に携わっている人は言語・文化的要素を含めて円滑なコミュニケーションが行なわれるように心掛けているのは間違いないと思われる。それは、起点言語の発信者の心の中にある概念を、目標言語の受信者の心の中にある概念とほぼ同じく伝えることを目標にしているからである。

要するに、通訳者にとって「うまく通訳した」ということは「聞き手の受け取ったメッセージが、発言者の伝えたいメッセージとほぼ同じである」ことを前提にしているのである。以下においては永田氏の通訳の理論的提案に従いつつ、理想的な通訳を実現するための条件は何かについて考察したい<sup>10)</sup>。

通訳の現場で最もおかしやすいミスは、目標言語に訳出されたときに受信者が通訳内容をわかりやすく受信したかどうかであると思われる。言葉ひとつひとつが機械的に通訳されているかどうかということはそれほどの意味を持たなければ、通訳の完成度としても物足りない面があると考えられている。

このような面で文化的コミュニケーションがうまく行なわれたかどうかによって通訳の完成度の評価が得られることになる。つまり、聞き手に文化的な負担のかからない「聞きやすい」通訳が求められるのである。経験豊富なベテラン通訳者は発信者のメッセージを最も効果的に再現するために、聞き手に負担をかけない「聞きやすい」通訳を行なおうと心がける。そして発信者にとっても言語・文化的な意図が十分に聞き手に受け入れられる通訳が良い通訳となるはずである。

したがって、通訳者の条件としては、発信者が伝えようとする意思を聞き手の立場で言語・文化的な要素をも加味しつつ、発信者の意思をうまく伝達しようとしなければならないのである。

### 3. 通訳能力と異文化コミュニケーション論

異文化の理解能力とは、言語と文化が異なる両者が相互の言語・文化の交流を行う場で必要とされる能力と言えよう。しかし、その方法としては両者が共通の言語を用いる場合と通訳者を中入りさせて行なわれる二つの方法がある。

---

10) 永田小絵(1999)「通訳とはいかなる作業か - 異言語間コミュニケーション・ツールとして -」未公开发表資料、pp.2-4.

共通の言語を用いる場合は、両者のどちらかの母国語、または双方にとっての外国語という二つの選択肢があろう。仮に、日本人の大学生と韓国人の大学生が日本語を介したコミュニケーションを行う場合、言葉の面での韓国人の学生が不利であることは明らかである。韓国人の学生は慣れない日本語を使うことで、自分の本来の姿よりも幼稚に見える場合もありうる。また日本語を母語とする相手に対して話しをするだけでも心理的なプレッシャーなどもあり、態度も萎縮しがちになると思われる。

その反面、双方にとって外国語である英語を使う場合を想定すれば、往々にして単純で具体的なことしか言えず、抽象的な議論まで発展させ、円滑なコミュニケーションが取れることは難しいのが一般的である。結果的に、お互いが言っていることも、わかるようなわからないような、頼りない理解しかできないし、ましてや英語の構文を組み立てる事ばかりに神経を集中し、コミュニケーションがうまく取れないはずである。

こうした言語の壁を取り除くために通訳者の中入りさせるのが一般的である。通訳者が入れれば少なくとも言語面でのコミュニケーションで不安や不利益が被られることは回避できると思う。自分の母語で自由に意見を述べるので、この時に通訳者の能力や役割が強調されるのは当然である。

普通、人間が生涯に習得できる外国語はそう多くない。とりわけ、異言語をもって相手の人と自由自在にコミュニケーションできる言語能力は母語だけだという人のほうが圧倒的に多いのである。こうした人に何かの契機で国際交流などの場面が訪れたときに通訳行為は欠かせないのであろう。

このように殆どどの国際交流における異文化コミュニケーションは通訳や翻訳を通して行われているにもかかわらず、異文化間の乖離を除去するために活躍している通訳者がいかなる能力を持って、如何なる役割を果たしているかを、異文化コミュニケーションの観点から取り上げ、論ずる事はあまりないのが現状である。また、通訳教育における異文化コミュニケーションの役割などに関して研究されたことも皆無に等しいのである。

こうしたことから今後、通訳者に異文化コミュニケーションの仲介者としての役割を期待し、更なる活動を担わせなければならないのである。

これまで通訳者の活動は個々の利用者や利用形態によってかなりの差があり、学術関連や科学技術関係の国際会議ではそういった異文化コミュニケーターとしての役割は比較的になかったかも知れない。しかし、取引先との商談や随行または団体などの見学などで通訳者に求められる役割は単なる言語情報の伝達だけでは済まなく、どちらかといえば異文化コミュニケーションへの積極的な解釈や伝達が期待されたのである。

こうした場では、通訳者は影のような存在ではなく、異文化交流のコーディネーターである。商談や懇談会などでもこのような期待があるのだから、国内外の地域社会にはじめてきた外国人に対する通訳者の役割は相互に対するサービスの次元においてもさらに大きく期待されると思われる。そして、今後、コミュニティ通訳制度<sup>11)</sup>を作ることになれば、異文化交流のコーディネーター的な役割を果たす能力を備えた文化の橋渡しとしての通訳者が必要になると思われる。

### 3.1 通訳教育と異文化コミュニケーション

外国語教育の目的は、音声言語にせよ文字言語にせよ、いずれスムーズなコミュニケーションを実現したい事にあると言えよう。通訳教育でも目指す目的は同じであろう。しかし、通訳教育ではもう一つ目指す目標として異文化コミュニケーション能力がある。

このような異文化に対するコミュニケーション能力の目的を達

---

11) コミュニティ通訳制度は、異なる社会生活で言語や文化の違いなどで十分な意思疎通ができない場合に通訳者を派遣し意思疎通を支援する制度として多文化社会の共生を図る目的で推進する通訳制度を言う。財団法人しまね国際センター(2006)「コミュニティ通訳ボランティア制度要綱」、p.1.

成するためには、相手の発言意図を正確に理解することと、自分の意図を相手に理解させることの両文化を理解する能力が必要になる。

通訳教育は以上の能力を身につけることを前提として、起点言語から目標言語への転換を行うための教育を施すものだが、このような通訳教育での重点はどこにおくべきか、また通訳教育を行なっている学部課程では何を教えるべきであるかを考察したい。

現在の学部課程の通訳教育では、まず学習者の語学力を向上させることに重点をおいて教育が行ないつつ、比較的簡単な通訳技能の修得に重点がおかれている。

そして、ある程度の語学力をもっている学習者を対象に通訳形式による分類で教育を行うことが多い。例えば、サイト・トランスレーション(文章口訳)<sup>12)</sup>、逐次通訳、同時通訳、放送時差通訳などがその内容である。このうち、サイト・トランスレーションを独立させず、逐次通訳と同時通訳の中にサイト・トランスレーションを含ませてもよいが、こうした通訳形式ごとに細かいスキルが含まれる。また、通訳訓練の事前準備の方法などの講義と実習があるが、本稿での論拠は避ける事にしたい。

さて、現在の国際コミュニケーションの研究分野では翻訳や通訳に関する研究が非常に立ち後れているが、全ての人が全ての言語を習得するわけにもいかず、また世界中どこでも母語と同様に話される単一の言語も実現不可能である現状に鑑みて、個人の言語的能力を尊重するためには翻訳や通訳を無視することはできない。そこで、異言語間コミュニケーション・ツールである優秀な通訳者をいかに育成していくかが社会的にも大きな課題となっている。

前述したように韓日両国における異言語コミュニケーションでは、どの言葉を使うかによってコミュニケーションのあり方にも影響が生じる。通常、異文化を有する者同士がコミュニケーションを行なう際に使用する言語のパターンは次の三種類に分けることがで

---

12) 韓国の通訳教育では文章口訳とも言う。

きる13)。

- 1) どちらか一方の母語を用いる場合。
- 2) 双方ともに外国語を使う場合。(英語を用いる場合が多い)
- 3) 双方ともに母語を用いる場合。(通訳者によるコミュニケーション)

まず、1)のどちらか一方の母語を用いる場合は、対話の力関係にアンバランスが生じがちである。特に外国語を話している側の言語能力が話し合いを行うには十分でない場合、母語話者は話しの速度の調節、反復、メタ言語的説明などの不自由を強いられることもありうる。また、外国語を話す側は、前述のように心理的な抑圧を受けるだけでなく、言いたいことが言えないもどかしさも感じなければならない。従って、相手の母語と相手の文化に対する高度な知識をもってコミュニケーションが十分に通じている場合のみ、1)の方法を用いてもコミュニケーションの齟齬<sup>そご</sup>は生じないということになるが、このような場合は決して多くない。

そして、2)の双方が共有する外国語を用いる場合にも、話し合いの当人同士の外国語能力によって制約を受ける。お互いに母語話者に劣らない外国語能力を習得している場合には、それなりに文化的なギャップもなく、円滑なコミュニケーションが可能になると思うが、そうでもない韓国人と日本人が英語を用いてコミュニケーションを取るとしたら話が円滑に進むとは限らないのである。

異文化間のコミュニケーションの場で十分にありうる設定ではあるが、英語を国際言語として位置づけ、世界の人とのコミュニケーションの手段と考えるならば、英語に偏向した教科目をあえて作る必要はなく、かえって英語と関わりのない異文化教育は排除すべきであろう。すると、将来、英語によるコミュニケーションの形態はいわゆる「英米文化」に枠内で行われるのではなく、英語で自国文化を発信するという形を取るようになるだろう。

---

13) <http://nikka.3.pro.tok2.com/repo990107.htm>

したがって、国際言語である英語を用いたとしても文化的な衝突は免れないのでやはり異文化コミュニケーションの障害は解消されないであろう。

しかし、現実的には、第二の外国語をもって異文化コミュニケーションを強調することによって、異文化間の相互理解を促進することになるのである。そうすれば、非常に高い水準の外国語能力が要求されるので、一般的な異文化コミュニケーションとしての対話ではかなり無理があると思われる。

最後に、3)の方法として双方ともに母語を用いる場合である。この場合がいわゆる通訳を介させた言語・文化的コミュニケーションである。異文化コミュニケーションや国際交流の分野では従来あまり関心の払われてこなかった方法であるが、実際にはもっとも現実的で広く行われているのである。

通訳者を介在させることによって話し合いの双方は母語で自由に意見を述べるのが可能になり、少なくとも言語によるコミュニケーション・ギャップは相当に解消されるのである。もちろん、それでも固有の文化に関わる部分では、細かいニュアンスまで完璧に伝える通訳ができる可能性は少ないにしても、コミュニケーションの成否が通訳者の能力と周囲の環境およびテキストの内容や表現方法などによって左右されるという事実は否めないのである。

したがって、通訳教育の現場においても異文化コミュニケーションの理解度を高めるような教育に心掛けなければならないと思うのである。

### 3.2 異文化コミュニケーターとしての通訳の役割

韓国人と日本人の間での通訳は、話し手あるいは聞き手が通訳者に対して自らの期待数値を明確に伝えることは比較的が多いと思われる。また、通訳者がどこまでにサービスを提供するべきかという意見もあまりないのである。これは通訳の場面によって多少の違いはあるが、会議通訳や法廷通訳あるいは放送通訳であれば、通訳者の伝達内

容がわりと限られている。しかし、観光、商談、病院、地方自治体の交流などの通訳では、場合によって通訳者に異文化コミュニケーションの溝を埋めるための工夫が要求される事もあると思われる。また、依頼者の明確な要求がなくても、通訳者自らが話し合いの双方にコミュニケーションのギャップを感じさせないように文化的解釈を補充することもある。

こうした事はRoda Robertsのアンケート調査<sup>14)</sup>でもわかるように、通訳者の業務には異文化コミュニケーションが含まれると回答している割合は七割近くになり、通訳者の解釈による言い換えを許容する回答も四割近くにもなる。

このアンケート調査では通訳者自身のアイデンティティの曖昧さも見て取れる。つまり、通訳者は一方では言語情報を伝達するサービスを提供するだけの専門職能しか持たないという考えがあり、もう一方では、異文化コミュニケーションの前線に立って両者の仲立ちをするべきであるとの使命感も持っているのである。これは常に二つの文化に引き裂かれる境界線の上で活躍している通訳者を悩ませる問題でもある。

こうした場合に通訳者には相互の文化を尊重しつつ、コミュニケーションのギャップを解消するような役割が期待されることになる。要するに、言葉を伝えるだけの通訳者ではなく、双方の文化や習慣を要領よく説明して誤解を取り除く役割を果たすことができこそ、異文化コミュニケーターとしての役割を果たしつつ、相互の文化的な障害をなくすことが可能になるのである。このように相互の文化的コミュニケーションに対する積極的な参与は会議通訳や法廷通訳ではむしろタブーであるが、このような文化的通訳が行われるのも異文化間の融合をはかるための通訳者の役割であり、そのためには二言語および二文化の理解能力を身につけた通訳者が求められるのである。

---

14) Roda Roberts(1998) 上海外国語大学・香港中文大学共催国際シンポジウム発表文再引用、pp.2-5.

#### 4. 異文化コミュニケーションの思考様式

本章では椎名佳代<sup>15)</sup>が提案している、異文化対応型思考様式の論説に従いつつ、異文化コミュニケーションの思考様式について考察したい。異文化間コミュニケーションを円滑に行うためには、相手の特有文化を理解することも大事であるが、異文化に対応するための思考様式を習得する事も欠かせないのである。

一つ目に、円滑な意思疎通を図るために、文化の異なる相手が誤解を招いたり、不快感を抱くような言動をしないようにすることである。そのために、場合によっては自文化では通用する言動を敢えて避けたり、自文化の習慣を犠牲にする必要もあるかもしれない。

そうすることに疑問を抱いたり、不快に感じたりしてまで、相手に合わせる必要はないが、多少の譲歩は強いられるかもしれない。どこで線引きをするかは各人の判断によるが、そのために必要なのは、相手の特有の文化とは何であるかを理解することである。その意味では、異文化理解によって自文化のどこが異文化と違うのかを理解することもできるので、異文化理解は自文化理解にも役立つのである。

二つ目には、相手の言動習慣が個人の性格にもとづくものばかりではなく、文化的な理由による物だと考える習慣を身につけるべきである。たとえば、日本人はアメリカ人から見ると無表情であり、何を考えているのかわからないというような場合に、すぐに個人の性格の問題であると決め付けてしまわないで、もしかしたら文化的な理由かもしれないと考えるべきである。

今日のようにグローバル化、国際化が進む中で国内に勤務する人の間でも異文化接触の機会は増加の一途をたどっている。このような状況の中で、異文化圏の出身の人々と交渉や議論をする当事者であれば、適切な異文化間コミュニケーションを図り、それに基づいて意思決定ができる能力を身に付ける必要がある。

---

15) 椎名佳代・平高史也(2006)『異文化間ビジネスコミュニケーションにおける通訳者の役割』『総合政策学8』慶応義塾大学、pp.18-19.

しかし、たとえば、日本企業のアメリカ支社に転勤になった人のように海外転勤を命じられた人でさえ、異文化社会であるアメリカ社会のビジネスの進め方を理解し、慣れるのは困難である。そのような状況を考えると、自文化の中にいる人に、適切な異文化間コミュニケーションを図り、異文化接触を成功させることを期待するのは現実的ではないと思われる。

そこで、通訳者にその役割の一部を任せることになるのである。たとえば、韓国人と日本人の間に立つ通訳者は、両国の言語と文化の密接な関係を考えると日本と韓国の文化をある程度、理解していることになる。さらに通訳者は仕事の性質上、異文化接触の経験が豊富であるため、異文化コミュニケーションに一助となる可能性は高いと思われる。

このような通訳者は異なる話し手と聞き手の言語・文化的な伝達作業を行う。たとえば、A言語の話者とB言語の話者がコミュニケーションを図る必要があるのに互いに相手の言語を理解できない場合、通訳者が介在し、一方の発言内容を他方の言語に訳すことにより両者の意思の疎通を可能にする。

このような異文化コミュニケーションの仲介役を担う通訳者にはどのようなスキルが必要なのかは重要な問題である。通訳スキルは語学力だけの問題だと考え、母語以外の言語、つまり外国語ができれば通訳はできると考えている人達がいまだに多いが、それだけでは不十分なのである。

最近では、通訳すべき会話の内容及びその内容に対する文化的背景知識も必要であることに気づく人も徐々に増えている。この場合の文化的背景知識とは異文化思考様式をも伝達できる能力を備えた通訳が必要なのである。

このように通訳する内容に関してある程度の専門知識に加えて、異文化間コミュニケーション能力を備えて行くのも今日の通訳教育の現場で行なうべき重要なスキルではないかと思われる。

## 5. おわりに

我々が日常的に行なわれているコミュニケーションは言語だけではなく、非言語的行動、例えばジャスチャー、表情、視線、姿勢など様々な手段を用いて行われている。また、その手段はコミュニケーションの目的や場面、相手によって、自分の意図を伝える一方で、相手の気持ちを読み取って社会的な相互交渉をうまく展開できるように使い分けられるのである。

これまで述べてきた異文化コミュニケーションと通訳の関係において、我々の日常のコミュニケーションと異なるもう一つの言語の干渉があることから1950年代から60年代まで世界の言語教育に大きな影響を与えたオーディオ・リングル・アプローチの教授法がある。この理論では通訳行為も含んで、異文化コミュニケーションにおいても言葉が違えば文化も異なることは双方が認識するとしている。

自分の文化圏に類似しているものに特にその意味や使われ方が共通しているだろうと誤解し、自らの文化圏の意味に基づいて相手の文化を解釈するざらめがある。その結果、コミュニケーション・ギャップを引き起こすことが多々ある。

こうしたことから日本語関連の教育現場では通訳であれ、コミュニケーション教育の現場であれ、言葉のみを教えるのではなく、その他の社会・文化に対する十分な認識をもった上で教育する必要があると思われる。

こうした事は異文化コミュニケーションにおける諸問題を解決していく上でも有効的である<sup>16)</sup>と考えられている。

通訳・翻訳教育という地平から見た場合、現在の学部課程における通訳・翻訳教育は圧倒的に言語教育に比重が置かれており、それが外国語教育の一環として位置づけられていることが多い<sup>17)</sup>。

---

16) 日本語教育学会(1998)『日本語教育ハンドブック』大修館書店、pp.130-131.

17) 染谷泰柱(1995)『日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準』『通訳理論研究10』第6巻1号、日本通訳学会、pp.46-58.

しかし、筆者は前述したように通訳者・翻訳者は本質的に異文化の仲介者としての役割を担う存在であるとし、学部課程の通訳・翻訳の教育現場では単なる語学訓練に終始するのではなく、異文化コミュニケーション者として基礎的な異文化理解能力が備えられる学習方法を提供しなければならないと思うのである。

## 参考文献

- 申長鎬(2008)「学部課程における通訳教育の可能性と限界性」『日本語文学』第41輯、日本語文学会、pp.65-82.
- 申長鎬(2011)「翻訳における異文化コミュニケーションのあり方」『언어학연구』16권 2호, pp.101-117.
- 申長鎬(2013)「翻訳教育と異文化コミュニケーション能力の相関関係の一考察」『언어학연구』18권 3호, pp.153-169.
- 財団法人しまね国際センター(2006)「コミュニティ通訳ボランティア制度要綱」、p.1.
- 椎名佳代・平高史也(2006)「異文化間ビジネスコミュニケーションにおける通訳者の役割」『総合政策学8』慶応義塾大学、pp.18-19.
- 染谷泰桓(1995)「日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準」『通訳理論研究10』第6巻1号、日本通訳学会、pp.46-58.
- 高見沢孟(2000)「コミュニケーション中心の日本語教育を考える」言語文化研究所、p.1.
- 東京大学出版会編(1993)『異文化への理解』東京大学出版会、p.305.
- 鳥飼玖美子(1994)「通訳と翻訳」『異文化理解とコミュニケーション1』三修社、pp.155-175.
- 永田小絵(1999)「通訳とはいかなる作業か－異言語間コミュニケーション・ツールとして－」未公開発表資料、pp.2-4.
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店、p.614.
- 日本語教育学会編(1998)『日本語教育ハンドブック』大修館書店、pp.130-178.
- 水野的(1995)『放送通訳講義』未公開、p.113.
- 徐璿(2003)「異文化コミュニケーション能力の育成－日本語教育を中心に－」『文明21』愛知大学出版、pp.69-72.
- 楊承淑(2005)「通訳における情報提示－日本語を起点言語として」『通訳研究』日本通訳学会、p.31.
- Roda Roberts(1998) 上海外国語大学・香港中文大学共催国際シンポジウム発表文再引用、pp.2-5.

<http://nikka.3.pro.tok2.com/repo990107.htm>

[http://en.wikipedia.org/wiki/Cultural\\_literacy](http://en.wikipedia.org/wiki/Cultural_literacy)

376 日本語文學 第 65 輯

<http://nikka.3.pro.tok2.com/tuuyakusagyoo.htm>  
<http://nikka.3.pro.tok2.com/repo990111.htm>

성 명(한 글) : 신 장 호

(한 자) : 申 長 鎬

(영 문) : Shin, Jang-Ho

논문영문제목 : A Study on the Intercultural Communication in  
Interpretation Education of Undergraduate Course

소 속 : 대구외국어대학교 외국어학부 부교수

E-mail : tsukubashin@naver.com

투 고 일 : 2014년 3월 31일

심사개시일 : 2014년 4월 3일

심사완료일 : 2014년 4월 29일